

学年目標を基盤とした学年力向上プロジェクトの実践

—「学級力向上プロジェクト」を参考にして—

所属 横浜国立大学大学院教育学研究科

氏名 藤原 寿幸

所属 調布市立若葉小学校

氏名 小松 陽子

所属 町田市立七国山小学校

氏名 川村 容平

1 問題と目的

中央教育審議会(2015)は「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」(答申)で、学校における様々な課題を解決していく上で、個々の教員が個別に教育活動に取り組むのではなく、校長のリーダーシップの下、学校のマネジメントを強化し、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げるとともに、必要な指導体制を整備することが必要である、と示している。また、文部科学省(2020)は義務教育の目的・目標を踏まえ、育成を目指す資質・能力を確実に育むためには、各教科等の系統性を踏まえ、学年間・学校間の接続を円滑なものとし、義務教育9年間を見通した教育課程を支える指導体制の構築が必要、という考え方を示し、令和4年度より小学校高学年における教科担任制が導入されることになっている。教科担任制導入の趣旨・ねらいにはいろいろ挙げられているが、その1つに「複数教師(学級担任・専科教員)による多面的な児童理解を通じた児童の心の安定に資する」(文部科学省, 2020)というものもある。このように、チーム学校によって組織として教育活動を行っていくことが重要視される今日、小学校現場において教科担任制が導入されることにより、小学校高学年ではこれまでのように一人の教師がほとんど一日中同じクラスの教育活動を行う状況から、学年教師全体で学年の教育活動を行っていくことが基本という状況へのパラダイムシフトが起こると考えられる。横浜市(2019)ではすでに「教科分担制を伴うチーム学年経営の強化推進事業」を2018年から開始し、「チーム学年経営」に関する取り組みを行っている。つまり、これまでも学年経営の視点は教育現場にはあったものの、新しい制度の導入により、その視点がより重要になってくると考えられる。

また、今回の学習指導要領には「カリキュラム・マネジメント」という言葉が多用されており、「各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育

の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことに努めるものとする。」とされ、カリキュラム・マネジメントにおいて、「PDCA サイクル」が重要であることが示されている。カリキュラム・マネジメントにおける「計画」、「実施」、「評価」、「改善」という考え方は、教科担任制が導入される令和4年度以降は学年経営でも重要な考え方になると考えられる。

では、先行研究において学年経営の実践研究はどのようなものがあるだろうか。学術論文雑誌検索サイト CiNii Articles で、2021年までの学術論文を中心に検索した。「学年経営」をキーワードにして検索したところ、該当件数は41件、そこに「小学校」のキーワードを加えたところ該当件数は4件であり、教科担任制である中学校や高等学校に比べ、実践研究の数は少なくなっていると推察された。

小学校高学年における教科担任制の導入に伴い、今後小学校における学年経営の実践研究の知見が重要になってくると考えられる。しかし、そのような知見は現段階ではあまり多く存在しない。したがって本研究では、小学校における学年目標を基盤とした学年経営を実践し、その考察を通して、小学校における学年経営の1つの方法論を提案することを目的とする。

2 方法

(1)「学級力向上プロジェクト」

参考にする教育方法は「学級力向上プロジェクト」(田中, 2013)である。学級力向上プロジェクトとは、子どもが学級づくりの主人公となり、学級力を高めるために、

学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力リーダーチャートを基にして話し合うスマイルタイム、そして学級力向上のために子どもたちが主体的に取り組むスマイル・アクションという3つの活動を、1年間(1学期間)のR-PDCAサイクルに沿って意図的・計画的に実践する共同的問題解決学習である。これを選んだ理由は、小学校において活用できる学級づくりの手法であり実践例やその効果が複数報告(蛭谷・田中, 2015; 藤原, 2018 藤原・井芹, 2018; 藤原, 2019)され、PDCAサイクルによる活動展開(実際にはPDCAの頭にR「調査」がついたR-PDCAサイクル)が特徴なので、チーム学校の考え方や学年経営にも応用できると考えられるからである。

①学級力アンケート R-PDCAサイクルをベースとして、意図的・計画的・共同的に学級力向上プロジェクトを推進していくためには、まず、「R」で具体的な分析が必要になる。学級力アンケートは、学級力の状況を診断するための、子ども向けのアンケートである。「公開性」を特徴とし、教師と児童・生徒が一体となって協力しながら、自分たちの学級をよりよくしようと取り組むための情報を示してくれる、開かれた児童・生徒主体のアンケート・システムである。

②学級力リーダーチャート 学級力リーダーチャートは、学級力アンケートの集計結果を領域別・項目別に視覚的に表現したレーダー型グラフである。児童らはアセスメントの主人公となって、その形状や領域別達成状況を指標として、自らの学級の仲間づくりの成果と課題について友だちと協力して診断したり、改善策を生み出したりするために、学級力リーダーチャートを活用する。拡大掲示し、自分たちの学級力の診断や改善のあり方について話し合うこともできる。

③スマイルタイム スマイルタイムとは、学級力アンケートの結果をレーダーチャートで図示し、それを見ながら教師と児童が共に「わが学級」の仲間づくりの成果と課題を話し合い、さらにこれからの学級力向上の取り組みのアイデアを出し合う、「子ども会議」であり、学級力向上の取り組みの成果を児童らに実感させることができる。また、それがさらなる取り組みの立案と実践につながる(田中, 2013)。本実践では、このスマイルタイムを学年経営の視点に合わせ、「学年力タイム」とした。

「学年力タイム」では、学年全員が体育館に集まり、司会進行の児童たちから学年力アンケートの結果が発表される。その後3学級それぞれから2名ずつの計6名グル

ープで、学年目標や学級目標についての考えを交流した。最後には全体で話し合われた内容を発表し、次の活動や行事への見通しをもつ流れで展開した。

④スマイル・アクション 児童らが学級力向上のために取り組む活動である。学年力向上プロジェクトとして各行事ごとに実行委員を募り、1年を通して学年メンバー全員が実行委員というリーダーを経験するようにした。活動中はリーダーを中心としたグループ活動を取り入れ、お互いの良いところを具体的に見つけ合うよう声かけし、活動終了後に見付けた良いところをGOODカードに記し、カードを交換し合う活動を取り入れた。

⑤はがき新聞 はがき新聞は、はがきサイズの用紙にミニ新聞形式で、子どもたちが自分の思いを綴っていくものである。1時間もあれば完成させられることが、子どもの学習意欲をかきたてる特徴になっている。学級力向上プロジェクトに関わっては、協同的な実践化への意識と自己責任の自覚を高める上で、大変効果的であり、子どもたちが書いたはがき新聞を掲示しておけば、学級力向上プロジェクトについても連帯意識を高めることにもつながる(学級力向上研究会, 2014)。

本実践ではこの学級力向上プロジェクトを参考にしながら、「学級力向上」を「学年力向上」に意味を置き換えて実践を行った(学級力向上プロジェクトは学年力向上プロジェクト、学級力アンケートは学年力アンケート、学級力リーダーチャートは学年力リーダーチャート、スマイルタイムは学年力タイム、等)。また、アンケート用紙については児童が自ら作成した学年目標に合わせ、田中が作成したアンケート項目を変更した。また各学級においてはそれぞれ「学級力向上プロジェクト」に取り組んだが(学級力向上が学年力向上につながるという仮説から)、紙面の関係と今回の研究の趣旨をふまえ、「学年力向上プロジェクト」を中心に取り上げる。

(2)対象 公立小学校 6年(3学級) 児童数111名(転出入でメンバーは若干入れ替わった)

担任: 20代男性, 30代女性, 30代男性

年度当初学年の実態: 5年生からクラス替えもなく、担任3名とも変わらずに新年度のスタートを迎えた。しかしコロナ感染予防のための突如の休校を挟んでいたため、6月の分散登校からの新学期の開始となり、児童の不安は非常に大きかった。先の見えない状況の中で無事に卒業を迎えることができるのか、学習はどうなっていくのかなど漠然とした不安を多くの児童が抱える中、学年で

学年目標を基盤とした学年力向上プロジェクトの実践

1 つのことに取り組むことへの意欲は大きかった。5年生の時より、学年全体での児童同士の仲は良く、算数の少人数クラスなどでもよい交流をしていた。そのため、学年みんなで目標を立てて全員で取り組んでいこうという学年力向上プロジェクトには関心も高く、小学校生活最後の1年をよいものにしていきたいという思いは強く持っていた。

(3) 質問紙

①「学年力アンケート」(児童が作成した学年目標に合わせて項目を作成)

②「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」(河村, 2001)

この「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」を7月(Time 1)と3月(Time 2)に実施し、回答に不備のなかった100名の質問紙に対して、対応のあるt検定を行った。②については、学校長に承諾を得た上で、調査を実施するにあたり、この調査は成績に関係がないこと、回答は強制ではなく回答しなくても不利益を被らないこと、個人のプライバシーは守られることが調査参加者に伝えられた。

(4) 手続き 学校長に承諾を得た上で、当該学年において、学級力向上プロジェクトを参考にして学年目標を基盤としたR-PDCAサイクルによる学年経営を1年間行った。1学期は学年目標づくりとそれを意識した学校生活に重点を置いた。コロナ休校明けの6月の新学期から、学年力向上プロジェクトのR-PDCAサイクルを開始した。また、R-PDCAサイクルにおける様々な活動については、学年力タイム等の話し合いについては学級活動の時間に行ったが、その他の活動については学校行事を中心に、学級活動、各領域、各教科の時間や給食、掃除、休み時間、朝の会、帰りの会、家庭学習など様々な機会を捉えて実施した。

本実践を対象化するために、本実践を評価していく方法として、R-PDCAサイクルの中で実施される学年目標の達成度を測るアンケートやレーダーチャートの他に、担任教師の感想や児童の発言や記録、さらに客観的な指標として児童の学校生活でのソーシャル・スキルを測定する、「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」(河村, 2001)を活用していく。

3 結果

本実践を学級力向上プロジェクトではなく、「学年力パワーアッププロジェクト」と題して、展開することと

した。

【経過の概要】

「学年力パワーアッププロジェクト」の取り組みのスタートは感染症拡大防止のための一斉休校明け、分散登校時期を終えた6月半ばすぎからとなった。まずは学期始めの学年集会を開き、この最上級生として最後の1年をどんな1年間にしていきたいか全体で話し合い、「学年力」という取り組みを位置付けた。

3-1 1学期の実践

Table1 学年力向上プロジェクトの主な取り組み

学期	月	・学年力向上プロジェクト 主な取組
1	6月	・学年オリエンテーション「良い学年って(プロジェクト開始)」 ・話し合い「学年の目標を立てよう」
	7/8月	・クラゲチャートによる学年力達成に向けた目標設定 ・チャート達成へ向けた日々の活動 ・ <u>第1回学年力アンケート</u> ・学級力・学年力をはぎ新聞作成
2	8/9月	・学年力タイム「学級力・学年力をはぎ新聞交流会」 ・日光日帰り移動教室へ向けての実行委員活動 ・「日光をはぎ新聞」作成 ・学年力タイム「日光をはぎ新聞交流会」
	10月	・学年体育会へ向け実行委員活動 ・「学年体育会をはぎ新聞」作成
	11月	・学年力タイム「学年体育会をはぎ新聞交流会」 ・卒業アルバム実行委員活動 ・社会科見学へ向け実行委員活動
	12月	・ <u>第2回学年力アンケート</u> ・「学級力・学年力をはぎ新聞」作成
3	1月	・学年力タイム「2学期をはぎ新聞交流会」
	2月	・学年劇ステージ実行委員活動 ・卒業式実行委員活動
	3月	・ <u>第3回学年力アンケート</u> ・学年力タイム「最上級生としての成長(最終結果発表)」

(ア) 学年オリエンテーション「良い学年って」 話し合い「学年目標を立てよう」

「学年力」という取り組みの開始の発表あと各学級に戻り、校長先生からのメッセージを紹介しながら「学校教育目標」について確認した。その後、保護者にとって「どんな子に育てほしいか」(「〇〇な子」「大切にしたいこと」等の表記でも可)のアンケート結果の紹介、担任の思いなども伝えた上で、学年目標に入りたいキーワードを個人、そしてグループで出し合った。「下級生の手本になる」、「自分で考えることができる」、「それぞれの良いところを認め合う」など具体的な目指す姿やキーワードが全クラスから出た。各クラスから出された案を各クラスの実行委員が持ち寄り、キーワードで整理し、学年に自分たちのめあてが浸透するにはどうしたら良いのかも考え、合言葉と一緒にまとめた。

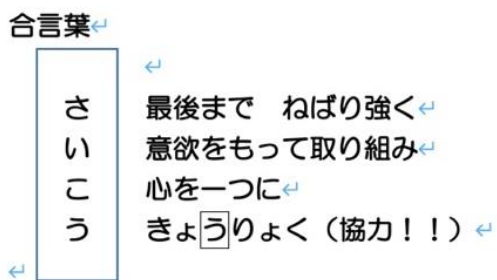


Figure1 決定した学年目標

「さ・い・こ・う」は最高学年として、最高の1年に、最高に思い出に残る、などの意味付けと共に決定された。

「さ」最後までねばり強く、「い」意欲をもって取り組み、「こ」心を一つに、「う」協力である。各クラスから、こんな最高学年になりたいという思いがたくさん出されたため、合言葉決定後、学校目標の「知」、「徳」、「体」の項目で整理し、全8項目の「学年力アンケート」が完成した。

実行委員は各学級に戻り、「学級で話し合ったことは、この言葉に生かされている」、「この項目に含まれている」などと、学級の話し合いから学年目標が決まったことを伝えた。このことにより自分たちで作った目標であることを意識できるようになり、「学年力パワーアッププロジェクト」をスタートする準備が整った。

(イ) 学年力達成に向けた目標設定

教室には常に学年力達成に向けて「目標達成シート」

～「学年力向上プロジェクト」3学期振り返り～

名前()

【かしくく やさしく たくましく】

合言葉						
さ 最後まで ねばり強く い 意欲をもって取り組み こ 心を一つに う きょうりよく (協力!!)	4 あてはまる	3 どちらかといえはあてはまる	2どちらかといえはあてはまらない	1あてはまらない		
	【かしくく】					
	努力	◎目標に向かって努力し、進んでいる	...	4	3	2 1
	切り替え	◎時計を見て、時間を意識して切り替えができる	...	4	3	2 1
【やさしく】						
進んで行動	◎学校の代表として 委員会・クラブでは進んで行動する (若葉の顔として! 下級生の手本に!)	...	4	3	2 1	
伝える	◎自分の考えをもち、伝える	...	4	3	2 1	
【たくましく】						
声掛け	◎困っている人がいたら、すぐに声を掛ける	...	4	3	2 1	
認め合い	◎それぞれの個性を認め合う (自分も周りの人も大切に)	...	4	3	2 1	
【たくましく】						
挨拶	◎元気よく、だれにでも 自分から挨拶する	...	4	3	2 1	
元氣	◎外で遊べる時は元気に遊ぶなど、明るい!	...	4	3	2 1	

Figure2 作成された学年力アンケート

を掲示した。学年目標の達成、学級目標達成に向けて、自分は何ができるのかを具体的に考えた。1学期は学期末や、月末など各学級の実態に合わせて学級力アンケートをとり、シートに書いた具体的目標に対してどうであったのか、それに対する友達からのコメントをもらい、各自の成長に生かしていった。2学期以降になると、学級力の高まりが学年力の高まりに直接関係があることを実感しだし、毎月アンケートをとり、コメントを書いて伝え合うようになった。

1学期は学期末最後の学級力アンケートの結果発表の会の後に、全学級ではがき新聞を書いた。「学年力の向上に向けて自分が頑張ったこと」「結果を受けて考えたこと」「2学期に向けて頑張りたいこと」など、様々に書いていた。このはがき新聞を持ち寄って、2学期最初に学年で集まり、1学期の各学級の様子を交流し合うことを伝えていたため、「自分の学級では」という視点で学年の様子を捉え新聞にまとめられる児童もいた。初めて自分たちの学級の実態が可視化されたことで、よさや課題も実感し、「切り替え」については課題だと感じていたけれど、想像以上だった。もっと意識していかないといけない。」「男女仲良く」についてはクラス遊びなどを通して良い結果になっていると思う。」と分析をし、「2学期は学年としての取組も多くなってくると思うので、「切り替え」の項目をよくするために、まずは同じ班の友達と声かけをしあいたい。」などのめあてをたてることができた。

3-2 2学期の実践

(ア) 学年力タイム「学級力・学年力はがき新聞交流会」

2学期の始めに、学年力タイムを開催した。内容は、「1学期の学年力結果発表」と「1学期の振り返りはがき新聞交流会」、「次の学年の活動に向けて」とした。

まず、「1学期の学年力結果発表」では、7月に実施した1学期の振り返りレーダーチャートを児童に提示し、1学期の学年力の現状が可視化された。学年目標のキーワードごとに結果を伝えると、「おー」という歓声や「もう少したねー」という声が挙がった。

次に、「1学期の学年力結果発表」や「1学期の振り返りはがき新聞」を基に、1学期自分たちのよかったところや頑張ったことについて学級を越えて交流した。「1組は、1学期から挨拶を意識していますが、まだまだです。」「2組は、切り替えがまだ遅いので、2学期も意識してい

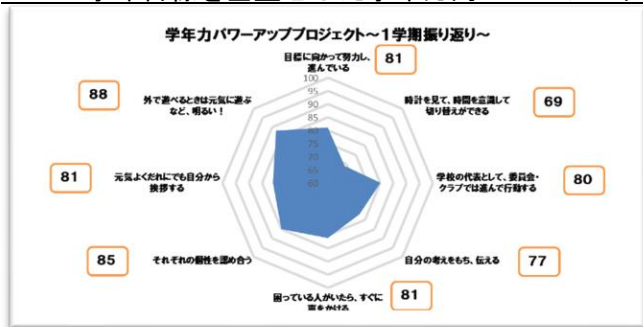


Figure3 1学期末の学年力レーダーチャート

きます。」「3組は個性を認め合うことを大切にしています。」と、レーダーチャートの結果や各学級の学級目標達成に向けての取組を関連させて話し合っていた。自分の学級の取組やよかったところを伝え合うことで、学年全体で学年目標達成に向けて取り組んでいることを再確認することができた。

最後に、次の学年の活動に向けて学年で頑張ることを共有した。2学期の学年の活動は、日光日帰り移動教室や学年体育会、社会科見学があることを伝えた。すると、「楽しみ!」、「やったー!」という声が挙がり、感染症対策で通常の活動ではなく制限もかかる条件でありながら学年で活動できることを楽しみにしている様子が観察された。また、次の学期の活動である日光日帰り移動教室について「どんな移動教室にしたいか」を考え、全体で共有した。「2学期最初の学年の活動なので、学年のみみんなで協力したい。」や、「日帰りで時間も限られているので、時間の意識をもって1日を過ごしたい。」「このような状況で、日帰りでも行かせてもらえることに感謝の気持ちを忘れずに楽しみたい。」などの意見が挙がった。全体で共有したことで、次の学年の活動で意識すべきことが明確になった。

(イ) 日光日帰り移動教室に向けて

学年力タイムで共有したキーワードを基に、実行委員が中心となって「協力!切り替え!みんなに感謝!最高の1日を過ごそう」というめあてをたてた。当日のバスレクでは、「引率の先生方やバスの運転手の方に感謝の気持ちを伝える挨拶をしよう。」という言葉掛けをしたり、日光江戸村のグループ活動では、「集合時刻に遅れないように、時計を見ながら動こう。」と声を掛け合ったりしていたことから、児童は自分たちで決めためあてを意識して取り組んでいることが分かった。

移動教室後には、「日光はがき新聞」を作成した。「計画や準備をしてくれた先生方や送り出してくれたお家の人へ感謝の気持ちをもって過ごすことができた。」や、

「集合時刻に遅れてしまったので、次の学年の活動では時間をよく見て行動したい。」と振り返る児童が多く、はがき新聞の記述からもめあてを意識していることが分かった。また、「今回の経験をこれからの学校生活に生かすことが大切である。」という振り返りから、切り替えを意識して「1分前行動をしよう」というめあてを次の活動や行事でも続けて意識していくこととなった。

日帰り移動教室後に、「日光はがき新聞交流会」を開き、移動教室でよかったところや頑張ったことを交流した。「1組は、挨拶を頑張っていたのでこれから2組でも意識したい。」など、他の学級のよさを自分の学級に生かそうとする意見も全体で挙がるようになった。1組の児童も嬉しそうな様子で、学級の成長が学年の成長につながることを実感した瞬間だった。

次の学年の活動「学年体育会」に向けて、「どんな学年体育会にしたいか」を考え、学年で頑張ることを全体で共有した。「みんなで一つのことを創り上げるので、協力していきたい。」「移動教室の経験を生かして、みんなで活動できることに感謝の気持ちをもって取り組みたい。」などの意見が挙がった。全体で共有したことで、移動教室に引き続き学年全体で意識すべきことが明確になった。

(ウ) 学年体育会に向けて

学年力タイムで共有したキーワードを基に、実行委員の児童が中心となって「心をついに!～全力!生かす!みんなに感謝～」というめあてをたてた。移動教室で学んだことを生かして、さらに学年の力を高めたいという児童の思いが込められためあてとなった。毎回の練習前に実行委員を中心に、全員でめあてのキーワードを唱えてめあてを意識できるようにした。練習前後の様子を見ていると、「あと1分で校庭に移動するよ!」、「準備(片付け)手伝うよ!」など、前回の移動教室で学んだ「時間を意識して行動」しようとする児童の言動が見られた。表現運動の練習の際に、動きを覚えるのに悩んでいる友達がいると、グループごとに練習する姿が見られた。また、全員リレーの練習の際には、休み時間にも練習に取り組む姿が見られ、意欲的に活動する児童の姿が観察された。学年体育会当日、「みんなで一つのことを創り上げることができて、心が一つになったと感じた。」「リレーの結果は残念だったけれど、感謝の気持ちをもってみんなで一生懸命練習に取り組めてよかった。」という振り返りが挙がった。感染症対策のため制限のある

学年目標を基盤とした学年力向上プロジェクトの実践

活動となったが、児童は充実感、達成感をもって学年体育会の活動を終えることができた様子だった。

学年体育会后に、「学年体育会はがき新聞交流会」を開き、学年体育会でよかったところや頑張ったことを交流した。「どの学級も、感謝の気持ちをもって全力で頑張っていたので、この経験をこれからの学校生活に生かしていきたい。」など、各学級だけではなく学年全体の頑張りを認める意見も全体で挙がるようになった。学年力向上のために「学年全体で」取り組んでいることを児童が実感していることが分かった。

(エ) 社会科見学に向けて

12月、ある児童から「社会科見学も、学年力向上のために実行委員でめあてを決めて学年の活動として取り組みたい。」という声が挙がった。「はがき新聞交流会から次の活動・行事への見通しをもつ」→「学年のめあてを決める」→「実践」→「はがき新聞による振り返りの共有」の一連の流れを大切にしたい指導が、児童に伝わっていることを実感した。そこで、社会科見学も各学級で実行委員を決めて、学年力向上のためにめあてを決めて活動することとなった。これまでの学年の活動の振り返りから、「切り替え」、「挨拶」、「感謝」というめあてのキーワードを意識して1日を過ごすことになった。

当日の班活動後には、すべての班が5分前には整列をして、しおりと鉛筆の持って次の見学の準備をしていた。

「移動教室のときに少し遅れちゃったから、特に意識しました。」という児童の言葉を聞いて、学年の活動のつながりを意識していることが分かった。前回の改善点を意識して今回の活動に取り組むことができていた。学校に戻り帰校式が終わると、下校前に引率してくれた教員の所へ行き、「今日は1日、ありがとうございました！さようなら！」と言う児童が、多くいた。学年の活動を積み重ねるごとに、めあてに向かって取り組む児童が増え、学年全体の雰囲気ができつつあることが分かった。

「ほんの1日の社会科見学だけれど、たくさんの方々のおかげで実現していることが分かった。」、「コロナ禍だからこそ、たくさんの方々へ「感謝」の気持ちをもつことの大切さを、例年の6年生以上に学ぶことができています。」と、学びを振り返る児童もいた。

3-3 3学期の実践

(ア) 学年劇ステージに向けて (卒業へ向けて)

3学期も1・2学期同様に、学年力タイムからスタートした。学期末に学年力アンケートをとり、学期初めに学

年全体で共有する流れも、子供たちの中でも把握されるようになり、「先生、学年力の結果がどうか、楽しみにですね。」との声も聞かれた。「2学期、色々な行事で頑張ったから、良い結果になっているといいな。」という声や「みんな、逆に厳しめになってきているんじゃないかな。」というような声もあった。

学年力タイムの司会進行は各学級持ち回りで担当する。3学期の初めのはがき新聞交流会では、自分たちで会を進めることも当たり前になり、「そろそろ全体集合して発表したいです。」などと時間も考えて行動していた。

2学期は行事等において学年で力を合わせて頑張ったと共に、やはり夏休みは2週間ほどしかなく、長期の学期だったことから、「時間の意識や切り替えは、頑張れた時もあったけど、行事と行事の間などは意識できてい



Figure4 2学期末の学年力レーダーチャート

なかった。」など課題も明らかになり、学年力アンケートの結果としては奮わない点もあった。しかし、「もう6年生も最後の3ヶ月だから、常に切り替えや時間は意識して、今まで色々な先生方が協力してくださったのだから、よい卒業式にしていきたい。」と前向きな言葉が多く聞かれた。卒業に向け、そして延期されていた学芸的行事の高学年のみの開催が決定し、(5年生は音楽会、6年生は劇ステージ)「こんな時期に学年だけだけれど行事もできて本当に嬉しい。感謝の気持ちを伝えられる3学期にしていきたい。」と、一致団結して頑張ろう、という学期初めの学年力タイムになった。

学年力タイムで行われる各学級の交流会でも、自分たちで進行していく流れの定着と、学級の様子を伝え合い、良さを感じ取ろうとする児童の姿が観察された。はがき新聞には「3学期改善するところは考える・伝えるのところだと思う。なぜなら自分の意見があってもそれを伝えなかったから。」、「反応を意識していきたい。対話

や周りの人と話し合う時にはしっかり心掛けていきたい。」とのめあてもあり、担任たちが指導しなくても、質問やうなづきを入れながら、対話ができていた。相手の意見を尊重する態度が他学級の児童と交流することでより意識されてきていることを実感した。担任は学年力を意識した良い行動を学年力タイムでも取り上げ、承認していくことを続けて行った。

(イ) 卒業アルバム作成・学年劇・卒業式に向けて

1年を通して、様々な実行委員を立ち上げてきた。その実行委員のめあて決めは、今年度は非常にスムーズであった。なせなら、学年目標を自分たちで決め、「学年力向上プロジェクト」として取組み、「学年力アンケート」として結果が可視化されているからである。「学年力」を高めるには、学年代表の実行委員としてどんなめあてにすると良いか、学年の交流会で出た意見を参考に決定していくようになっていた。

2学期からスタートしていた卒業アルバム実行委員も、3学期から始動した劇ステージ実行委員、奉仕活動実行委員も同様であった。また卒業式実行委員でもそうであった。年間を通して、全児童一回は実行委員を経験したこと、学年の交流会の司会進行やグループ交流会での対話などリーダーシップを発揮して活動に取り組む機会を多く設けることができ、そこに大きな「学年力の向上」という目標があったことは有効であった。

劇ステージの練習では、実行委員の他にも場ごとにリーダーを立てて、自分たちの演技を振り返り、音声や大道具の担当ごとにもリーダーを立ち上げ、自分たちの劇を自分たちで作ることを目指して活動をした。

(ウ) 最後の学年力タイム（結果発表）と卒業式

劇ステージが実施できたのは、卒業式の一週間前であった。2学期後半より、学級力アンケートも毎月とり、その結果から個人のめあてをたて、めあてに対する振り返りのメッセージの交換をするなどして学年力の向上の取組をしてきたため、最後は卒業式直前の劇ステージ後に学年力アンケートを行った。この3月下旬に行った、第3回のアンケート結果では、2学期の結果に比べるとレーダーチャートの大きさがどの項目もかなり大きくなり、多くの児童が学年目標に対して「達成できている」と実感できていることが推察された。「目標に向かって努力」は95を記録し、今まで目標に向かって何度も学級や学年で話し合ってきたことの成果が見てとれた。「すぐに声かけ」「個性を認め合う」についても95を超えた。

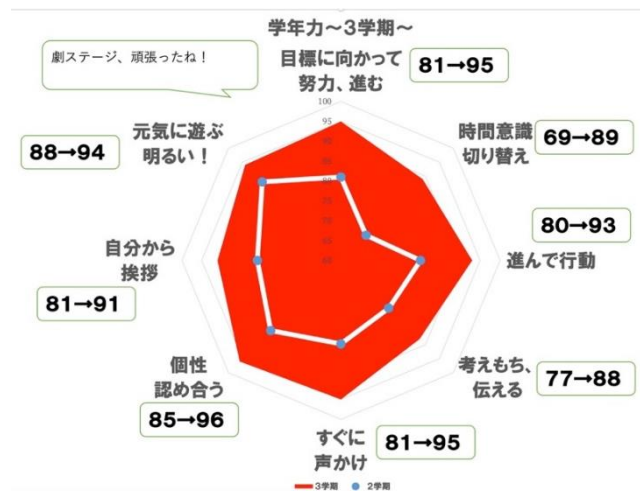


Figure5 3学期末の学年力レーダーチャート

Table2 ソーシャルスキル尺度における対応のある t 検定結果

	Time1 (n=100)	Time2 (n=100)	t 値	比較
1 あいさつ	7.45 (0.85)	7.50 (0.98)	0.70	
2 聞く	7.25 (0.95)	7.36 (1.04)	1.04	
3 許容	6.68 (1.10)	6.91 (1.05)	2.06 *	Time1<Time2
4 集団マナー	7.23 (1.05)	7.23 (0.93)	0.00	
5 ストローク	7.29 (0.85)	7.32 (1.10)	0.25	
6 会話配慮	6.97 (1.11)	7.05 (1.18)	0.72	
7 反省	6.95 (1.19)	7.13 (1.10)	1.31	
8 能動援助	7.08 (1.02)	7.30 (1.00)	2.18 *	Time1<Time2
9 話す	6.75 (1.47)	7.15 (1.11)	2.60 *	Time1<Time2
10 感情	7.32 (0.89)	7.30 (1.07)	0.16	
11 対人形成	6.28 (1.65)	6.53 (1.49)	1.57	
12 能動参加	6.42 (1.34)	6.63 (1.34)	1.37	
13 リーダー	5.94 (1.65)	6.52 (1.37)	4.07 **	Time1<Time2
14 自己主張	5.74 (1.84)	6.28 (1.69)	2.80 ***	Time1<Time2

上段：平均値 下段：標準偏差 有意確率 *p<.05,**p<.01,***p<.001
1～8は配慮のスキル, 9～14はかかわりのスキル

また、7月(Time 1)と3月(Time 2)に実施した「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」の結果は、3月(Time2)において平均値が「集団マナー」のみ変化なしで、それ以外全ての項目において上昇が確認され、対応のあるt検定の結果、「許容」「能動援助」「話す」「リーダー」「自己主張」については有意に高まり、特に「リーダー」「自己主張」の伸びが目立った。

はがき新聞には「卒業式では今まで勉強を教えてください。」「卒業式は今まで積み重ねてきたことを全て生かしてぶつけていきたい。」「感謝という気持ちをもってその場に立てればいいなと思っている。校歌を歌う時には学校への感謝を込めて、これまでで一番の歌を歌ってお礼をしたい。」との思いも表現されており、学年力の最後の結果発表で学年としても大きく成長したことを確認し、このまま感謝の気持ちを忘れずに卒業式を迎えようと決意を新たに学年全員で大きな拍手をした。

卒業式当日、校庭の卒業生送り出しにて学級のみんなで集まり写真を撮る様子に保護者の方から「こんなに学級が仲良く最後を迎えている様子はとても嬉しいです。」との声もあった。本年度の卒業アルバムの表紙は「さ・い・こ・う」の学年の合言葉の目標と各学級の学級キャラクターである。学年としてみんなで目標に向かって協力してきたことを胸に抱き、卒業していった。

4 考察

(1) 学年目標を基盤としたR-PDCA サイクル

本実践では、小学校第6学年において学年目標を一人一人が意見を出し合うことからスタートし、決まった学年目標を基に学年力アンケートを作成し、それを活用(1年間で3回の学年力アンケートの実施)しながら学年目標達成に向けてR-PDCAサイクルによって学年経営を行った実践である。特に本実践のオリジナリティとしては「はがき新聞交流会から次の活動・行事への見通しをもつ」→「学年のめあてを決める」→「実践」→「はがき新聞による振り返りの共有」の一連の流れを大切したところであると考えられる。

3月下旬に行った、第3回のアンケート結果では、2学期の結果に比べるとレーダーチャートの大きさがどの項目もかなり大きくなり、多くの児童が学年目標に対して「達成できている」と実感できていることが教師による観察からも推察された。とくに「目標に向かって努力」「すぐに声かけ」「個性を認め合う」については95を越

え、今まで目標に向かって何度も学級や学年で話し合ってきたことの成果が見てとれた。「目標に向かって努力」については1年間、学年目標を達成することをプロジェクト化して行ってきたということが大きな理由として挙げられるが、特に10月からは各学級において学年の目標を達成するために、どのようにするかについて毎週振り返ったことも理由として挙げられると考えられる。その週の自分の取り組みについて「◎」、「○」、「△」、で評価し、それについて具体的にコメントを記入し、班で相互交流を行うという取り組みを継続して実施してきたからこそ、「目標に向かって努力」し続けた、という実感ももてたと考えられる。「個性を認め合う」については、GOODカードの交流がとても効果的であったことが推察される。クラスの班替え時や学年行事における実行委員の任務終了時に、メンバー全員から「がんばったところ」、「いいところ」をカードという形に残るもので承認されたり、逆に承認したりすることにより、相互の承認感が高まり「個性を認め合う」ということが時間の経過とともに互いに実感できるレベルまで高まったと考えられる。「すぐに声かけ」(困っている人がいたらすぐに声をかける)については、学年児童全員が行事の実行委員を経験できたことが理由として挙げられる。行事の実行委員だけではなく、この学年では学年力タイムの司会など、意図的にリーダーとなる場面を多く設け、また意図的に様々な児童に経験させるという体制であった。そして、「リーダーとは？」ということについて議論をした際、「困っている人に声をかける」ということがリーダーの責任の1つであるという確認がされた。そのようなリーダー像の学年全体での共有と、確かな実践により「すぐに声かけ」ができた、してもらったという相互の実感につながったと考えられる。

また、子どもたちが書いたはがき新聞には以下のような記述がみられた。

- ・体育会は心を一つに協力するものだと分かった。勝つという気持ちはとても大切だけれど、6年生全員で協力し、目標に向かって頑張ることはもっと大切だと感じた。
- ・日光のグループ発表の準備の時に、グループの人や他のグループの人たちにも「これはこうした方がいいんじゃない」と、声をかけて体育会のことを生かすことができた(6年生全員で協力すること＝学年力向上に向けて、協力を頑張っていこう、と確認したから)。これからはもっとレベルアップできるように、どうすればみんなのた

めに協力や助け合いができるか考えていきたい。

以上は一部に過ぎないが、学年力向上プロジェクトを通して、学年の児童が丸丸となって主体的に目標に向かって挑戦を継続したことを示す記述であると捉えられる。

(2) ソーシャルスキル尺度の対応のある t 検定の結果

7月(Time 1)と3月(Time 2)に実施した「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」(河村, 2001)の結果は、3月(Time2)において平均値が「集団マナー」のみ変化なしで、それ以外全ての項目において上昇が確認され、対応のある t 検定の結果、特に「リーダー」「自己主張」については有意に高まり、より大きく成長したことが示された。ソーシャルスキルは、小学生の学級や学校における意欲や適応に関連する重要な要因であることが先行研究でも報告されている(河村, 2003; 武蔵・河村・藤村・荻間澤, 2012; 村上・西村, 2014)。

「リーダー」については上でも述べたように学年児童全員が行事の実行委員を経験でき、さらに自分が実行委員というリーダー役をしっかりとがんばったということ GOOD カードにより友達から承認されたことが影響していることが推察される。「今までリーダーを経験したことはなかった。声かけなど経験してみても大変さも実感したけれど、みんなに良いところを言ってもらって、やって良かったと思った。」とリーダーとしての経験を振り返る児童も多くいた。お互いの良いところを見つけ合う活動や、学年力タイムにおいて学年みんなで交流し考えを伝えることができるようになったことも、児童の自信に繋がっていった。

また「自己主張」については学年力タイムにおける児童一人一人の役割が影響していると考えられる。基本的に学年力タイムのグループ活動は、上でも述べたように、3学級それぞれから2名ずつの6名構成で行われた。その際、各学級では学年力タイムにおけるグループ活動では学級の代表として、学級の話合いの内容を責任をもって伝えるということが、児童の中に浸透していた。学級の話合いの内容をしっかりと伝えるという使命感をもって、学年力タイムに参加していたので、周りの意見に流されたり、自分は発言を遠慮したり、ということにならず、「自己主張」の部分が全体的にできるようになったと考えられる。また、学年力タイムの前の学級での話し合いの際も一人一人が意見を言えるように、考える時間の確保や、いきなり発表ではなく必ず自分の意見を書く活動を入れていたことも要因であると考えられる。

(3) 学年力向上プロジェクトに取り組んだ教師の感想

本実践に取り組んだ教師の感想の一部を記述する。

・子どもにとっては最高。子どもの自主性を伸ばしていくという視点がいい。こういう教育を目指していくのが、子どものためなのだった。

・子どもたちが次の行事に向けて、学年力タイムで学年目標や目指すものについて頑張ることを決めていたのがよかった。行事が始まる前から、学年としての方向性があり、それに対して担任はどんなことができるかを話し合える。子どもも目指すゴールが分かっている。共通の目標があるって本当にいいことしかない。「学年の教師」として子どもたちを見守っていくのができた。

・3学期ラストの学級集会に向けて、自分たちが自主的に作った動画の中に、写真と共に「このクラスがこのメンバーでよかった。この学年がこのメンバーでよかった。」という台詞が入っていたことに感動した。「学年劇ステージ」を乗り越えてきたからこそ、この台詞になったのかな、学年力向上プロジェクトを学年全員で取り組んできて、劇でも全員の協力がすごかったから、この台詞になったのかな、と思った。

・学年行事のグループ活動が、本当にスムーズだった。特に学年劇は、3学期ということもあり、学年力向上プロジェクトを通して、子どもたちが学年として1つになったのを感じた。いつも学年力タイムでも「より良くしていくには」の視点で話し合っていたので、劇でも子どもたちは「より良くするには」の視点で話し合っていた。そのような行動があった時に、担任3人で共通して褒めることができた。そしてそのまま、卒業式へ向かったので、学年全員で作上げようという意識が高かった。

・目標と指標を共有し、学年力タイムを通して学年行事を協働で行うことにより、担任同士の絆が強まった。

以上、教師の感想からは、この実践が学年経営に有効であったことや、実践を通して学年教師の同僚性・協働性が高まると考えられることなどが示唆された。

5 本研究のまとめと今後の課題

本実践は学年目標達成に向けて、R-PDCA サイクルによって学年経営を行った実践である。3月下旬に行った、第3回の学年力アンケート結果では、1学期、2学期の結果に比べるとリーダーチャートの大きさがどの項目もかなり大きくなったこと、また教師の観察や児童のはがき新聞の記述からも、学年目標達成を果たすことができたと考えられる。また、それだけではなく7月(Time 1)と3

学年目標を基盤とした学年力向上プロジェクトの実践

月(Time 2)に実施した「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」(河村, 2001)の結果は, 3月(Time 2)において平均値が「集団マナー」以外全ての項目において上昇が確認され, 特に「リーダー」「自己主張」については有意に高まり, より大きく成長したことが実証された。教師の感想からは, この実践を通して学年経営に効果があったことや学年の同僚性・協働性が高まったことなどが示唆された。チーム学校(中央教育審議会), 小学校高学年における教科担任制導入(文部科学省, 2020)など, 小学校における効果的な学年経営の在り方が期待されている。また, そこにカリキュラム・マネジメント(文部科学省, 2017)に視点も必要になる。本実践の中核を担った「学年力向上プロジェクト」はカリキュラム・マネジメントの視点であるR-PDCAサイクルによって展開される。この学年力向上プロジェクトの実践により, 学年経営で重要な学年目標の達成や, 学級や学校における意欲や適応に関連する重要な要因であるソーシャルスキルの向上, さらには, 目標や指標の共有とそれを基にした協働により, 学年教師の同僚性や協働性も高まると考えられることなどが示唆された。このことにより, 本研究により小学校における学年経営の1つの方法論を提案することができたと考える。

また, 本研究をまとめていく上でいくつかの課題がみられた。第一に, 本研究は1校1学年による実践である。今回のような結果が他の小学校でも同様の傾向を示すかについては検討できておらず, 今後の検討が必要である。

第二に, 本実践では学年力向上プロジェクトと同時に各学級では学級力向上プロジェクトを展開している。上でも述べたように, 今回は学年経営をテーマにしているため, それぞれの学級の詳細な活動については, 調査・言及を行わなかった。しかし, 学級独自の取り組みが結果に影響を及ぼしている可能性については否定できず, そのことは課題として残ると考える。

したがって今後は, 他の学校や学年でも実践を行って効果測定も含めた分析・考察をしたり, 学級力向上プロジェクトと学年力向上プロジェクトの相互の関連について追究したりすることが求められる。今後の課題とした。

引用文献

中央教育審議会 (2015) . チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)

蛭谷みさ・田中博之 (2015) . 小学校5年生における学級力向上プロジェクトの開発と評価—教科横断的なカリキュラム編成を通して— 早稲田大学大学院教職研究科紀要 第7号 pp.59-88

藤原寿幸(2018). 小学校高学年における学級力向上プロジェクトを活用した学級づくりの事例—特別活動や道徳などにおける取り組みと児童によるアクションカードの作成— 早稲田大学大学院教職研究科紀要 第10号 pp.57-72

藤原寿幸・井芹まい(2018). 小学校低学年児童の自律性支援を志向した教員の学級集団づくりの効果に関する検討—集団の発達に応じた学級目標の設定の視点から— 学級経営心理学研究, 7, 31-42.

藤原寿幸(2019). 小学校中学年における学級目標を基盤としたR-PDCAサイクルによる学級づくりの事例—生徒指導の視点から捉えた学級経営— 早稲田大学大学院教職研究科紀要, 11, pp.57-72.

学級力向上研究会 (2014) . 学級力を高めるはがき新聞の活用—小・中学校での活用事例— 理想教育財団

河村茂雄(2003). 学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討 カウンセリング研究, 36, 121-128

文部科学省 (2016) . 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)

文部科学省 (2017) . 小学校学習指導要領

文部科学省 (2020) . 義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方に係る論点メモ(案)

村上達也・西村多久磨(2014). 小学生の担任教師への信頼感, ソーシャル・スキル, 学級生活満足度の関連 学級経営心理学研究, 3, 1-10.

武蔵由佳・河村茂雄・藤村一夫・荻間澤勇人(2012). 児童が学級生活で活用しているソーシャルスキルと心理的ストレスとの関連 学級経営心理学研究, 1, 44-50.

田中博之 (2013) . 学級力向上プロジェクト—「こんなクラスにしたい!」を子どもが実現する方法 金子書房

横浜市教育委員会(2019) 教科分担任制を担うチーム学年経営の強化推進事業

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/083/siryu/_icsFiles/afiedfile/2019/07/26/148593-5_2_1.pdf (2021年8月24日アクセス)